



生原稿の行方 : 神戸松蔭女子学院大学所蔵幸田露伴関係資料

著者	青木 稔称
著者別名	AOKI Toshihiro
雑誌名	文林
巻	42
ページ	1-10
発行年	2008-03-20
URL	http://doi.org/10.14946/00001573



生原稿の行方

—— 神戸松蔭女子学院大学所蔵幸田露伴関係資料 ——

青 木 稔 弥

以下は、松岡讓「『明暗』の原稿その他」(『池崎忠孝』池崎忠孝追悼録刊行会 中央公論事業出版 昭37・10・25^①) に記録されている赤木桁平(池崎忠孝)の発言である。

先生は下情に通じて居られないからご存知ないが、何でも聞くところによると、社の校正係とか何とか職長とか、当然の役得か権利かなんかのようには、自分たちで勝手にホトコロ(赤木はフトコロというところを、どこの国の言葉かいつも必ずホトコロと発音した)にねじ込んで、ときにはたって所望するものへ堂々と譲ってるなんて噂さえあるくらい、知らぬは何かばかりという奴です。これからは一つ河岸をかえ、先生特別のお声がかかり、我々門下へも順番にまわして頂くという有難い判例を、この際確立して下さいな。あんな縁もゆかりもないところで闇取引されるよりは、ねえ、諸君。その代りパテント料に、最初は僕が拝領ということにし

て――

『明暗』が連載されていた大正五年当時は、松岡譲が述べる通り、「もともと、原稿は雑誌なり新聞社なりに渡れば、それに組み指定がマークされて直ちに印刷へまわされ、特別の所望が無い限り著作者のところには戻って来ない慣習になっており、「漱石の場合も例外ではなく、小説原稿は一つも夏目家にはない」ありさまであった。

著作権についての認識が深まった現代において、「社の校正係とか何とか職長とか」の「役得」が根絶されたかと言え、必ずしも、そうではないようである。二年ほど前、『氷の宮殿』翻訳 古書店で100万円」「村上春樹さん生原稿流出」「元編集者が無断で自宅へ」という事件が起こり、日本文芸家協会は、平成十八年七月三日、「理事長 坂上弘」名で以下のような「要望」を出した。

生原稿「流出」等についての要望

ある現存作家の生原稿（肉筆原稿をさす。以下「生原稿」という）が、妄りに流出している問題について当協会は、当該作家のみならず多くの著作者にとってまことに不本意な事態であると考え、遺憾の意を表します。

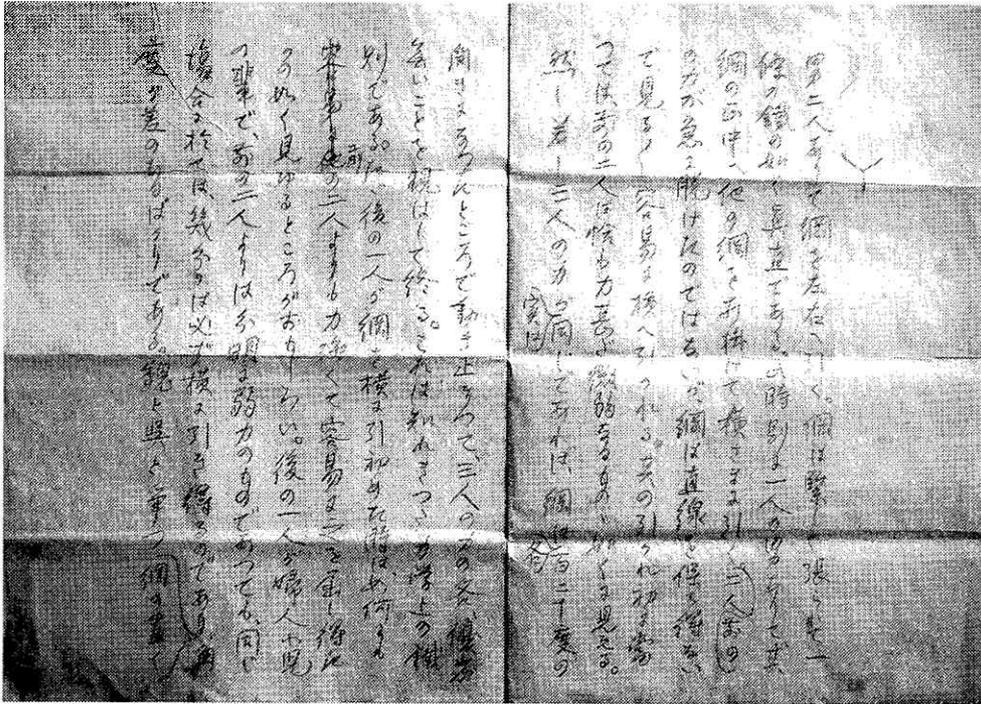
今日、著作者、あるいは著作者の遺族は、出版社・新聞社等（以下「出版社等」という）に生原稿を手渡す場合においても、その旨明確に意思表示をしない限り、出版社等に生原稿を譲渡、あるいは所有権放棄はしておらず、出版社等で用済みとなり次第、速やかに返還されるべきものと考えています。このことは、すべての出版社

等にとっても周知の事柄となっているものと協会は信じています。それにも拘わらず、最近、冒頭に記したような問題が生じているため、当協会としては、出版社等に対し、生原稿について、企業の責任として保管し、掲載・刊行済みとなった場合には、速やかに著作者本人又は遺族へ返還することを要望します。また、そのためにも出版社等では、各社の担当部署の全社員に対し、生原稿の所有権が著作者本人又は遺族にあり、十分な注意をもって保管し、返却すべきものであることを周知徹底されることを望むものです。

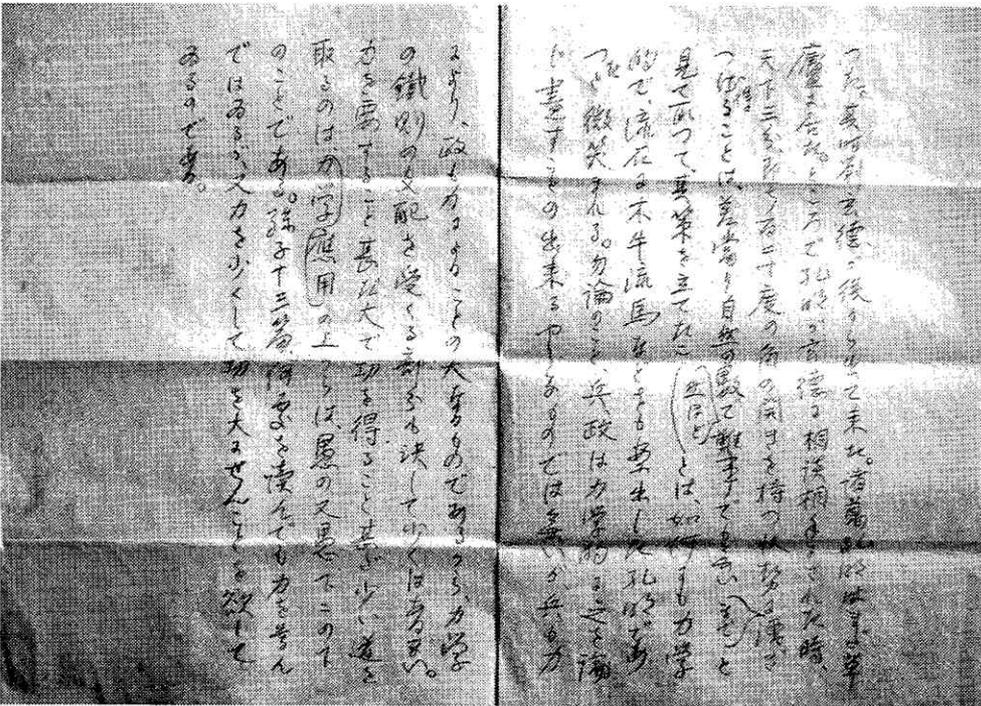
同時に当協会は、著作者・遺族にも、生原稿の所有権について正しく認識し、出版社等で用済みとなった生原稿返還の要求を、出版社等に対して明確に意思表示することが望ましいと考えています。

また関連して書簡類の問題についても指摘し、要望します。著作者から知人等に送られた書簡類については、その所有権は受取人にありますが、書簡類の内容である著作物の複製権・出版権等の著作権、公表する権利等の著作者人格権、私生活を妄りに公表されないこと等のプライバシーに関する権利は、あくまで著作者本人に残ります。従って、特段の事情がない限り、著作者・遺族の意思に反して書簡類の公表・刊行をされると、著作者・遺族の有するこれらの権利のいずれかを侵害することとなります。ところが、このことを出版社等の担当者が十分に認識していなかったことに起因すると思われる紛争が生じています。このような書簡類の公表・刊行については、事前に著作者・遺族の許諾を得るべきであることを出版社等において周知徹底していただくよう強く要望するものです。

さて、本稿で扱うことにした幸田露伴の生原稿は、左の一点二枚である。



25.0×34.7cm

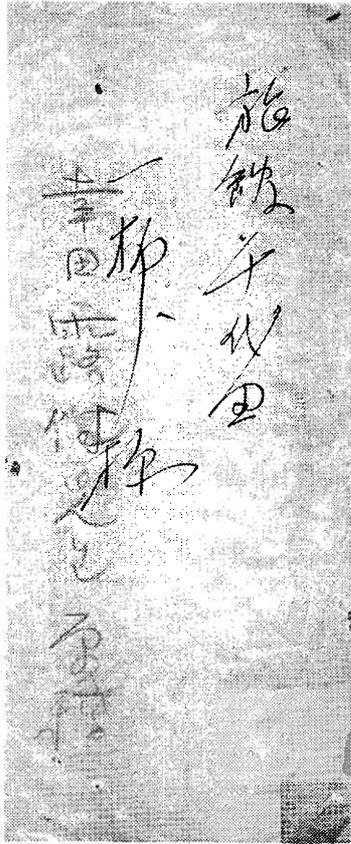


25.0×34.7cm

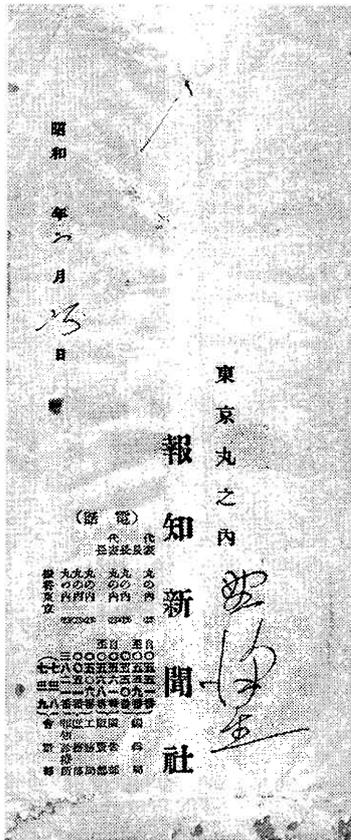
の力が同じであれば」と記した後で挿入した「実は」が「実に」と変更されていることと、一枚目左四行め「如何にも容易に他の二人よりも力強く容易に之を屈し得たかの如く見ゆるところがおもしろい。」の最初の「容易に」を削除して「他」を「前」と変更したのを主要なものとしてよいであろう。

鉛筆書きであることについては、当時の露伴にとっては普通のことと、例えば、小林勇『蝸牛庵訪問記』（岩波書店 1956・3・10第1刷 1981・12・10第14刷）の昭和十四年四月七日の条に「渋沢伝は五月十三日には是が非でも上梓しなくてはならぬというので先生も、もういやいやしているわけにいかなくなった。今日も午後行ってみると、二階では先生がしきりに鉛筆で書いていた」とある。⁽⁵⁾

露伴の生原稿の紹介は以上の通りだが、より大きく問題にすべきであったのは、この生原稿に付されていた書簡の方である。「報知新聞原稿用紙」二枚に記されており、封筒表に「旅館千代田」「一柳様」のペン書、「幸田露伴先生原稿」の朱書、「東京丸之内」「報知新聞社」と印刷された封筒裏に「野沢生」「二月六日」のペン書がある。



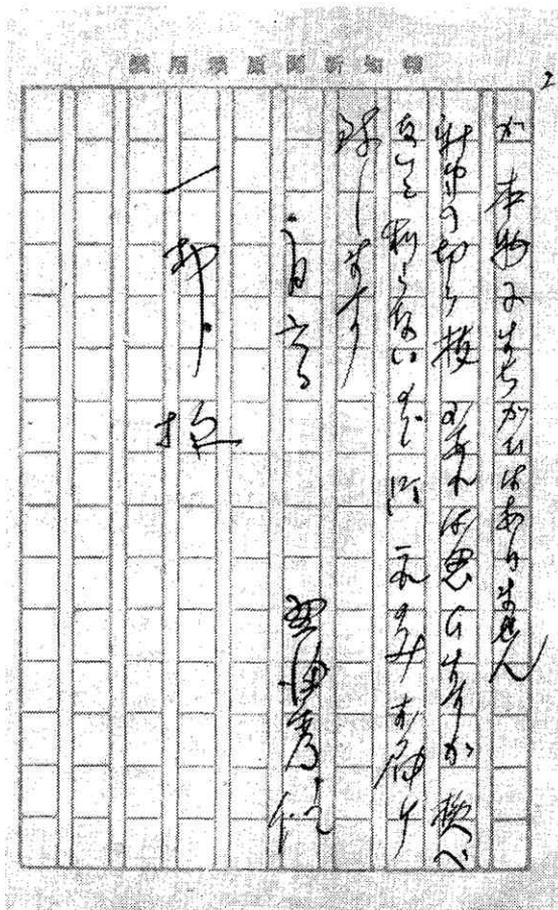
20.1×8.3cm



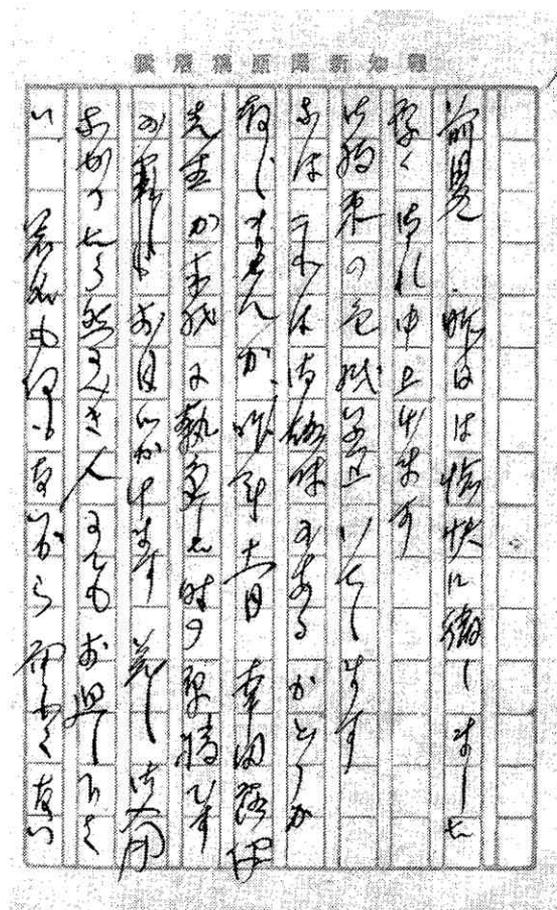
生原稿の行方

前略 昨日は愉快に徹しました
 厚く御礼申し上げます
 御約束の色紙呈上いたします
 なほこれは御趣味にあるかどうか
 存じませんが、昨年十一月 幸田露伴
 先生が本紙に執筆した時の原稿です
 お目にかけます 若し御入用
 なかつたら然るべき人にてもお廻し下さ
 い、署名も何もないから面白くない
 が本物にまちがひはありません
 新聞の切り抜があれば思ひますが捜べ
 ないと判らないのです これのみお届け
 致します

二月六日 野沢秀信
 一柳様



19.1×12.8cm



19.1×12.8cm

一枚目八行め冒頭の四文字分は、削除したつもりの部分であろうから、翻刻に反映させてはいない。

何年との記述はないが、昭和十七年の書簡であることは確実である。「旅館千代田」は、千代田橋際の東京市日本橋区江戸橋二ノ十一にあった千代田旅館^⑥であろう。

一柳某の素性は不明だが、野沢秀信は、少し古いデータではあるが、『新聞人名鑑』昭和四年版（新聞之新聞社 昭3・12・20）によれば、「報知新聞経済部（住）東京市外大久保百人町一五二」である。^⑦赤木桁平のいう「役得」によって「幸田露伴先生」「の原稿」を入手したということで、露伴自身の意図とは完全に無関係な所でなされた授受であった。一柳某がそのまま手元においていたかどうかはわからない。神戸松蔭女子学院大学に古書店経由で入るまでの半世紀は、今のところ、空白としか言いようがない。

(1) 『ああ漱石山房』（朝日新聞社 昭42・5・30）に「訂正補筆」（あとがき）して再録。

(2) 06年3月10日発行の毎日新聞大阪本社14版30面の記事タイトル。同日の朝日新聞大阪本社14版38面にも「村上春樹さん『氷の宮殿』」「生原稿が流出・売買」「編集者から？」「一種の盗品」「雑誌で指摘」とある。ただし、毎日新聞に『氷の宮殿』の場合、同年（02年——引用者注）夏に東京・神田神保町の古書店に渡り、100万円以上の値段がついた。この古書店は毎日新聞の取材に対し、「うちで扱ったのはこの1作だけ。いつ売れたかなど、詳しいことはお答えできない」と話した。とあるのに対し、朝日新聞には「2003年から今年1月まで、『氷の宮殿』の訳稿を120万円の値段で目録に掲載していた東京・神田神保町の古書店主は、この2月に個人の買い手がついたと話している。」とある。朝日新聞掲載の「古書店の目録に載った村上春樹さんの自筆原稿」の写真は玉英堂書店のそれである。

- (3) 日本文芸家協会のホームページによる。
- (4) 中公文庫版では下の二(昭52・5・10)に収録。
- (5) 鉛筆書きは原稿執筆に限定してのことである。例えば、神戸松蔭女子学院大学所蔵の昭和十五年の吉田洋一あて書簡、19.4×47.7 cmは、墨書である。

拝復

御書ならびに御高著

たゞ今郵到かたじけ

なく拝受致候

寒地寒時せいぐ

学芸のため御保養

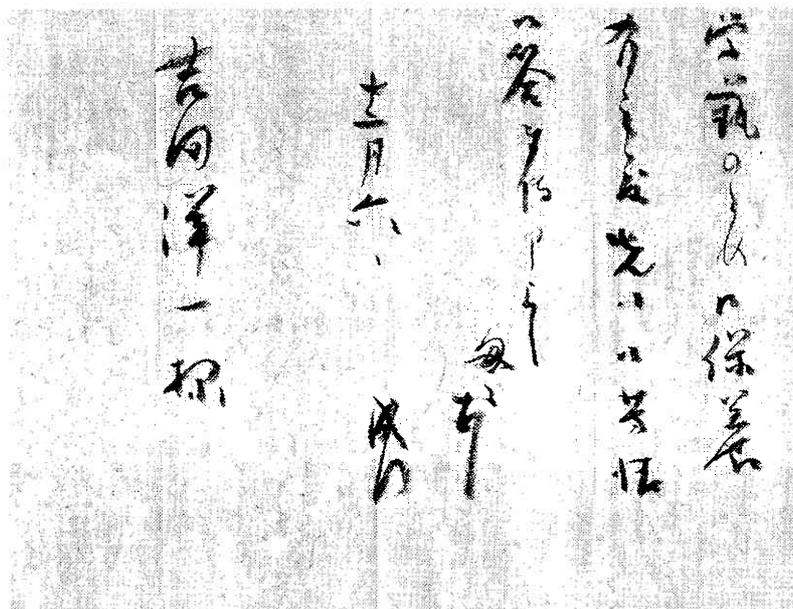
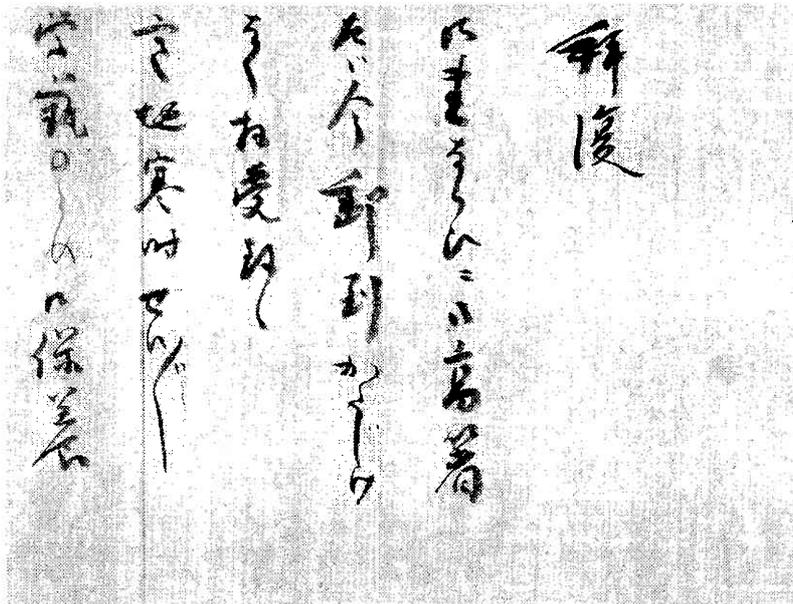
有之度先は御芳情

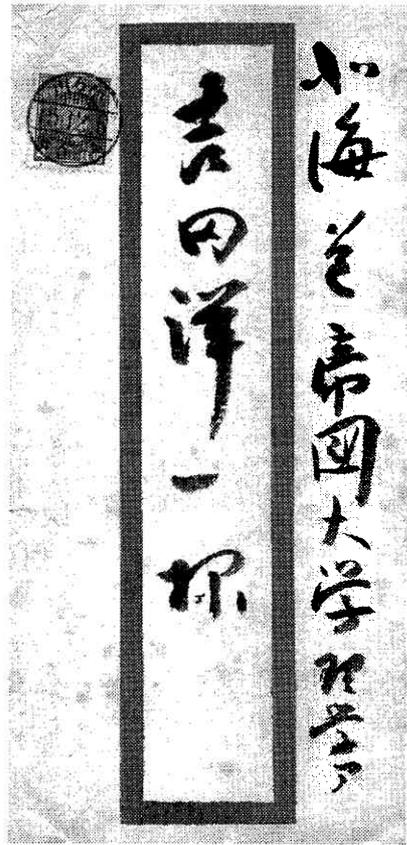
御答奉伝申上候

匆々頓首

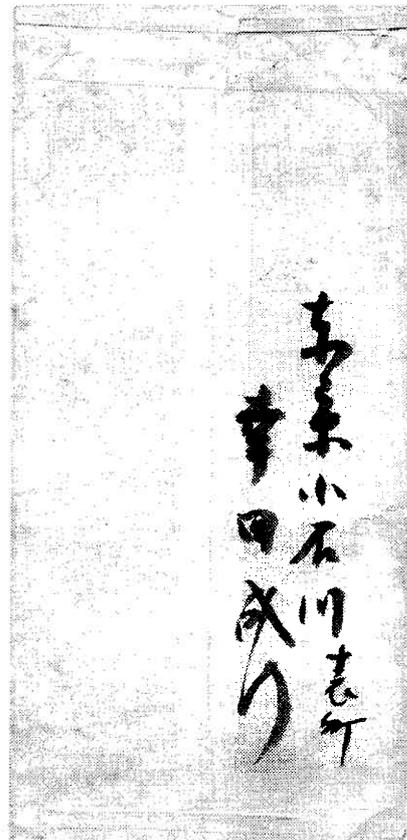
十二月六日 成行

吉田洋一様





21.7×10.3cm



封筒の表は、四銭切手に「小石川」「15・12・6」「后014」の消印、「北海道帝国大学理学部」「吉田洋一様」の墨書、封筒裏は「東京小石川表町」「幸田成行」の墨書である。吉田洋一は、日本出版文化協会監修『現代出版文化人総覧』昭和十八年版（協同出版社 昭18・2・15 昭18・8・25二版）によれば、「明三一生」「札幌市南六条西一七」「東京 東大数学」「一高教授、東大助教授」「現職 北大教授、同評議員」「数学、随筆」「日本数学物理学会評議員、中等教育数学会評議員、日本技術教会評議員」「1.ポアンカレ「科学と方法」（岩波書店） 函数論（同） 零の発見（同）」「2.算術以前（文芸春秋1）動く地球、動かぬ地球（同） 林檎の味（現代三）」である。

(6) 昭和十七年十一月の鉄道省編纂『時刻表』（時刻表復刻版戦前・戦中編）日本交通公社出版事業部 昭53・3・17）によれば、「宿泊料 五円・六円」で、「クーポン宿泊料金（夕刻より翌朝迄の一泊夕食付税金別）」は七円である。

(7) 「昭和三年七月蒐集し初め十二月に完成」した「原稿」（凡例）によるもの。